

サイの御教え

一九六三年ダシヤラー祭の御講話
プルシヤとプルショーツタマ

Gokouwa1.jpg

人は、他のことはすべて知っていますが、死については知りません。人はなぜ死ななければならぬのか？死ぬことは何のためになるのか？人はなぜ死ぬのか？二度と死なないようにするため、というのがこれらの答えです。人が生まれてくるのは、再び生まれてこないようにするためです。人は生まれてきて、土地や財産、物品や穀物、快適で贅沢な品物ぜいたくを手に入れます。人はそれらが自分に幸福を与えてくれるものだと思いい、そのため、それらを手に入れることが、人の努力奮闘の目的となっています。しかし、神を現させるという目的を忘れていきます。あなた方は、「人はなぜ、善良な仲間を求め、善い行いをし、心を善い思いへと向けるべきなのですか？」と、尋ねるかもしれません。あなた方は私に耳を傾けていますが、聴くしれません。あなた方は私に至福アーナンドを与えてくると何を得ますか？私があなた方に至福アーナンドを与えているということに、同意するものではありませんか？

では、あなた方は私に何をお返しにしてくれるのですか？
私があなた方に話していることへのアーチャーラ（従
うこと、守ること）を私によしなさい。私が教える
ことを実践しなさい。それで十分です。私の求めるこ
とはそれだけです。

人は猫や犬のように死ぬべきではありません。人は、
この世に来たときよりも善良になって、幸せになって、
この世を去るべきです。人は、自分が見たもの、聞い
たもの、触ったもの、嗅いだもの、味わったものすべて
の中に神を見るチャンスを与えられたことへの感謝に
満ちて、この世を去らなければなりません。人は息を
引き取るとき、神を思い出さなければなりません。

決して神から注意がそれることを許してはならな
い

その想起を得るためには、一生をかけた練習が必
要です。車のハンドルを握っているとき、あなたは、車
の中で交わされている会話を聞いたり、さらには、そ
の会話に加わったり、他のさまざまなることをするかも

しませんが、あなたの注意はずっと前方の道路に注
がれています。母親は、三つの水がめを重ねて頭の上
に乗せ、同行の女性たちとおしゃべりをしながら井戸
から戻ってくるときも、頭の中は家の揺りかごに寝か
せてきた赤ん坊のことに集中しています。それと同じ
ように、あなた方が世間でさまざまな義務や責務に
従事しているときも、決して目的である神から注意
がそれることを許してはなりません。神の栄光と、神
の慈愛と、神の遍在のしるしに、いつもよく注意して
いなさい。

兵士となるのは、何年も厳しいトレーニングを積ん
だ結果です。先頭の列を行く兵士の勇気と冷静さは、
幾年かの練習と訓練を重ねた産物です。先ほどラー
ニナラシンハシャーストリが述べたように、何年も真
剣に勉強して、初めて試験を受けることができるので
あり、さらに、その結果はすぐには発表されないので
す。あなた方が結果を知るには、いくらか待たなけれ
ばなりません。ですから、一息ごとに神を思い出す
習慣を育てなさい。そうして初めて、息を引き取ると
きに神を思い出すことができるのです。

ある老人が死の床に就いていました。その老人はカナダ国の者だったと思います。最期のとき、老人は何やらつぶやくことしかできず、子どもたちには何を言っているのかさっぱりわかりませんでした。そこで、医者を呼んで、言葉がはつきりするるように、酸素か何かを吸入させてほしいと頼みました。きっと、自分のお金を隠した場所の正確なありかを言っているに違いないと、子どもたちは推測しました。そのため、子どもたちは、あらゆる手段を使って言葉がはつきり聞き取れるよう試みました。しかし聞き取れたのは、「カ」だけでした！ それはカナカ（金）のことなのか、カル（牛）のことなのか、あるいは、カナジャ（穀倉）なのか、カサバリケ（ほうき）なのか！ と、子どもたちは問いました。ほうきを見せられたとき、老人はうなずき、亡くなりました。そのため、その老人は、ほうきに生まれ変わらなければならなくなりました！

死は完成であり、避けられない

あなた方はその老人のように死ぬべきではありません

ん。あなた方はビーシユマのように死ななければなりません。ビーシユマは、パーンダヴァ兄弟に「シャーンテイ パルヴァン」（『マハーバーラタ』の「平安の巻」）を説いていた間、矢の床に横たわっていました。そして、その臨終のときには、ビーシユマの目の前にも、ハートの中にも、クリシユナがいたのです。

死は、恐ろしいものであり、幸福な状態のときに話題に挙げるべきではない！ と考えられています。しかし、死は、善いものでも悪いものでもありません。死という事柄に関して、あなた方に選択肢はありません。死を歓迎するからといって、死を早めることはできませんし、死は悪いものだとは非難したからといって、死を避けて通ることはできません。死は完成であり、避けられないものです。生まれ落ちた瞬間から、火葬場への行進は始まっています。他の人より早く到着する者もいれば、迂回^{うかい}して遅く到着する者もいます。人の違いはそれだけです。しかし、それでも人は、まるで死が遠い先の災難であるかのように考えて、歩き回っているのです。

近所で子どもが亡くなると、あなた方はその父親

に、すべては夢だ、子どもは生まれ、死んでいく、なぜなら、子どもは貸し主で、前世で背負った古い負債を知らせるためにやって来たのだ、等々と言って慰めます。けれども、いざ、自分の子どもを失うと、それと同じことを主張して自分を慰めたりはしません。それらはもっぱら、他人を慰めるためのものです。

死ぬのは体であり、体に住まう者ではない

アルジュナはクリシュナをプルショッタマ（至高のプルシャ）と呼んでいました。というのは、クリシュナこそは、プルシャたちの間で最高の存在であるからです。

プルシャには、プラ（要塞ようさいとなった都）の中にいる者、という意味があります。プラとは、すなわち体です。どの体にもプルシャが内在しており、全宇宙にはプルショッタマが内在しています。ですから、つまり、死ぬのは体であり、体に住まう者ではないのです。自分の中にはプルシャが存在しているという確信は、心のあらゆる悪を洗い清め、感覚器官のあらゆる悪い性癖を洗い清めます。飲み物だけでなく、器も清らから

なければなりません。そうでなければ、どんなに長く瞑想や憶念をしても、果報はもたらされません。それゆえヴェーダは、厳しい規律を伴う修行と共に、バラモンに任されているのです。そうした修行によって心が洗い清められないなら、ヴェーダの学習は不毛な行為です。

ある男が今にも死のうというときに、男の妻が尋ねました。「私はどうなるの？」

両親も同じことを問いました。「私たちはどうなるのか？」

使用人たちも悲しそうに問いました。「私たちはどうなるのでしょうか？」

男は死に際に、力なく周囲を見回して、皆に問いました。「私はどうなるのだ？」

もし、その男が賢い男で、その問いの答えを自分で考えていたのであれば、その出来事を見越しておくべきでした。そうすれば、男は安らかに死に、その穏やかな死を見た子どもたちも、得るところがあったでしょう。

今、人々の会話の中にある流行が広がっています。

それは、何か自分によいことがあったと思うと、「お
お！これはすべて神の恩寵です」と、言うことです。
そして、もし、嫌いな人に同じことが起こると、それ
は明らかに神の恩寵ではない、なぜなら、神は特別に
自分のものであり、別の人のものではないからだど、
言うのです。何か自分が嫌だと思うことが起こったと
き、どうしてあなた方はそれも神の恩寵のしるしとし
て受けとめないのですか？ 自分を神の手に委ねなさ
い。成功も失敗も神に与えさせなさい。そうすること
に何か問題がありますか？ 神はあなたを強くする
ことに熱心なのか、あるいは、長い目で見ればそれは
あなたにとって良いことなのかもしれません。どうし
てあなたに判断などできますか？ 判断するあなた
は一体何様ですか？ なぜ判断するのですか？ ベス
トを尽くし、黙して語らずにいなさい。あなたの心を
そうした姿勢に定めなさい。

死は事前に知らせをよこさない

あなた方は、カメラマンがいつシャッターを押すかを

知りません。少なくとも、ニラヤムで写真を撮ってい
るマシューは、カメラを持ってあなたの前で跳び回り、
ここだ、あそこだと指を差します。しかし、死は事前
に何の知らせもよこすことはなく、あるいは、「用意
はいいか？」と言って、あなたの用意ができるまで待つ
こともありません。ですから、いつも用意ができてい
るようにしなさい。そうであれば、唇に神の御名を、
清められたハートに神の姿を、きれいに刻印すること
ができるでしょう。

あなた方は、今、私を導き手として得ているという、
素晴らしい恩恵を自覚していません。私は、あなた方
全員を改心させるまで休みません。私の仕事の土台
は出来上がりました。これから、その上に建物が建ち
ます。私は、身の回りのものは一切持たず、一切宣伝
することなく、一人で世界中を回ります。なぜなら、
私は、私の栄光に、私の真理に、身を据えているから
です。私は、すべてのものとアートマの関係を持ってお
り、それゆえ、私は常に成功しています。

作物を守るには、雑草を取り除き、肥やしを撒まか
なければなりません。それが、ここにいるヴイドワン

マハーサバー（ダシヤラー祭の期間に開催される、
ヴェーダを復興するためのヴェーダ学者の会）の学僧^{バンデイト}
たち、長い間使われずに無視されてきた道具たちの、
仕事なのです。この偉大な仕事に加わりなさい。これ
は、あなた方の一生で最高のチャンスです。

一九六三年十月二十日

プラシャーンティ ニラヤム

Sathya Sai Speaks Vol.3 C30